

雪の翼

泉鏡花

青空文庫

かしはぎきかいぐんせうゐ
柏崎海軍少尉の夫人に、民子といつて、一昨年故郷な

る、福井で結婚の式をあげて、佐世保に移住んだのが、今度

少尉が出征に就き、親里の福井に歸り、神佛を祈り、影

膳据ゑつつ座にある如く、家を守つて居るのがあつた。

旅順の吉報傳はるとともに幾干の猛將勇士、或は

士卒——或は傷つき骨も皮も散々、に、影も留めぬさへある中

に夫は天晴の功名して、唯纔に左の手に微傷を受けた

ばかりと聞いた時、且つ其の乗組んだ艦の帆柱に、夕陽の光

を浴びて、一羽雪の如き鷹の來り留つた報を受け取つた時、連添

ふ身の民子は如何に感じたらう。あはれ新婚の式を擧げて、一

とせふすた、年の衾暖かならず、戦地向つて出立つた折には、忍んで泣かなかつたのも、嬉涙に暮れたのであつた。
あゝ、其のよろこびの涙も、夜は片敷いて帯も解かぬ留守の袖に乾きもあへず、飛報は鎮守府の病院より、一家の魂を消しに來た。

少尉が病んで、豫後不良とのことである。

此の急信は××年××月××日、午後三時に届いたので、民子は蒼くなつて衝と立つと、不斷着に繻子の帯引緊めて、つか／＼と玄關へ。父親が佛壇に御明を點ずる間に、母親は、財布の紐を結へながら、駈けて出て之を懷中に入れさせる、女中がシヨオルをきせかける、隣の女房が、急いで腕車を

仕立したてに行く、とかうする内うち、お供ともに立つべき與會平よそべいといふ親仁おやぢ、
 身支度みじたくをするといふ始末しまつ。さて、取るものも取りあへず福井ふくいの市まち
 を出しゅつぱつ發はつした。これが鎮守府ちんじゆふの病院びやういんに、夫をを見舞みまふ首途かどで
 であつた。

冬の日の、山國やまぐにの、名なにしおふ越路こしぢなり、其日そのひは空そらも曇くもりた
 れば、漸やうやく町まちをはづれると、九頭龍川くづりうがはの川面かはづらに、早はや夕暮ゆふぐれの
 色いろを籠こめて、暗くらくなりゆく水蒼みづあをく、早瀬はやせみだ亂なれて鳴おとる音おとも、千々ちゞ
 に碎くだけて立つ波なみも、雪ゆきや！其その雪ゆきの思おもひ遣やらるゝ空模そらもやう様あふみ。近江あふみ
 の國くにへ山越やまごしに、出いづるまでには、中なかの河内かはち、木きの芽峠めたうげが、尤もつと
 も近ちかきは目めの前まへに、春日野峠かすがのたうげを控ひかへたれば、頂いたゞきの雲眉きくまゆを蔽おほうて、
 道みちのほど五里りあまり、武生たけふの宿しゆくに着ついた頃ころ、日ひはとつぷりと暮くれ

果てた。

長旅は抱へたり、前に峠を望んだれば、夜を籠めてなど思ひ

も寄らず、柳屋といふに宿を取る。

路すがら手も足も冷え凍り、火鉢の上へ突伏しても、身ぶるひ

やまぬ寒さであつたが、

枕に就いて初夜過ぐる頃ほひより、少し氣候がゆるんだと思ふ

と、凡そ手掌ほどあらうといふ、俗に牡丹となづくる雪が、し

とくと果しもあらず降出して、夜中頃には武生の町を笠のや

うに押被せた、御嶽といふ一座の峰、根こそぎ一揺れ、揺れ

たかと思ふ氣勢がして、風さへ颯と吹き添つた。

一の谷、二の谷、三の谷、四の谷かけて、山々峰々縦横

に、荒れに荒るゝが手に取るやう、大波の寄せては返すに齊しく、此の一夜に北國空にあらゆる雪を、震ひ落すこと、凄まじい。

民子は一炊の夢も結ばず。あけ方に風は凪いだ。

昨夜雇つた腕車が二臺、雪の門を叩いたので、主従は、朝餉

の支度も、々に、身ごしらへして、戸外に出ると、東雲の色

とも分かず黄昏の空とも見えず、溟々濛々として、天地唯

いっぽく
一白。

不意に積つた雪なれば、雪車と申しても間に合ず、ともかくも

お車を。帳場から此處へ参る内も、此の通りの大汗と、四

人の車夫は口を揃へ、精一杯、後押で、お供はいたして見

まするけれども、前途さきのお請合うけあひはいたされず。何なにはしかれ車くるまの齒はの埋うづまりますまで、遣やるとしませう。其上そのうへは、三人にんがかり五人ごにんがかり、三井寺みゐでらの鐘かねをかつぐ力ちからづくでは、とても一寸いつすんも動きはしませぬ。お約束やくそく東ひとなれば當柳屋たうやなぎやの顔立かほだてに參まゐつたまで、としり込ごみ入ひとすること一方ひとかたならず。唯急たゞいそぎに急いそがれて、こゝに心こゝろなき主しうじう従じうよりも、御機嫌ごきげんようと門かどに立つて、一ひと曳ひひけば降ふる雪ゆきに、母衣ほろの形かたちも早はや隠かくれて、殷々いんくとして沈しづみ行く客きやくを見送みおくる宿やどのものかへが、却かへつて心こゝろ細こい限りかぎであつた。

酒代さかては惜をしまぬ客きやく人じんなり、然しかも美人びじんを載のせたれば、屈くつき竟やうの壯わかも佼の勇さみをなし、曳えい々く聲ごゑを懸あけ合あはせ、暇なはて、畦道あぜみち、村むらの徑みち、揉もみに揉もんで、三里りの路みちに八九時間じかん、正午しやうごといふのに、峠たうげの麓もと、

かすがのむら
春日野村に着いたので、先づ一軒の茶店に休んで、一行は吻
と呼吸。

茶店ちやみせのものも爐ろを圍かこんで、ぼんやりとして居るばかり。いふ

までもなく極月しはすかけて三さん月ぐわつ彼岸ひがんの雪ゆきどけまでは、毎年まいねんこん

な中なかに起おき伏ふしするから、雪ゆきを驚おどろくやうな者ものは忘わすれても無い土地柄なとちがら

ながら、今年ことしは意外いぐわいに早はやい上に、今いま時どき慙かくまで積つもるべしとは、

七八十になつた老人らうじんも思おもひ懸がけないのであつたと謂いふから。

來くる道みちでも、村むらを抜ぬけて、藪やぶの前まへなど通とほる折をりは、兩りやう側がはから

倒たふれ伏ふして、竹たけも三尺じやくの雪ゆきを被かついで、或あるは五間けん、或あるは十間けん、恰あたも

眞綿まわたの隧トンネル道のやうであつたを、手てで拂はらひ笠かさで拂はらひ、辛からうじて腕く

車くるまを潛くぐらしたれば、網あみの目めにかゝつたやうに、彼方あなたこなた此方すづめを、雀すずめが

ばらく、洞ほらに蝙蝠かうもりの居ゐるやうだつた、と車夫くるまやど同土語どうしかたりなど

して、しばらく澁茶しぶちやに市いちが榮さかえる。

聲こゑの中に噫あッと一聲ひとこゑ、床几しやうぎから轉ころげ落おちさう、脾腹ひばらを抱かへて

呻うめいたのは、民子たみこが供ともの與曾平親仁よそべいおやぢ。

ここびん 這は便なし、心しんを冷ひやした老おいの癩しやく、其その惱輕なやみろからず。

一いつたい 體たれ誰たれ彼かれといふ中うちに、さし急いそいだ旅たびなれば、註文ちうもんは間まに

ああは 合あは 殊ことに少わかい婦人をんななり。うつかりしたものも連つれられねば、供とも

さして遣やられもせぬ。與曾平よそべいは、三十年餘みそとせあまりも律儀りちぎに事つかへて、飼か

ひひごろし 殺ころのやうにして置おく者の氣質きだては知しれたり、今いまの世よの道中だうちうに、

雲助くもすけ、白波しらなみの恐おそれなんど、あるべくも思おもはれねば、力ちからはなく

ても怪けしうはあらず、最もつとたより 最も便べんよきは年としこそ取とつたれ、大根だいこんも引ひ

く、屋根も葺く、水も汲めば米も搗く、達者なればと、この老
 僕を擇んだのが、大なる過失になつた。

いかに息災でも既に五十九、あけて六十にならうといふのが、
 内でこそはくるく、れ、近頃は遠路の要もなく、父親が
 本を見る、炬燵の端を拜借し、母親が看經するうしろか
 ら、如來様を拜む身分、血の氣の少ないのか、とやかくと、心
 遣ひに胸を騒がせ、寒さに骨を冷したれば、忘れて居た持
 病がこゝで、生憎此時。

雪は小止もなく降るのである、見るく内に積るのである。
 大勢が寄つて集り、民子は取纏るやうにして、介抱する
 にも、藥にも、ありあはせの熊膽位、其でも心は通じたか、少

しは落着いたから一刻も疾くと、再び腕車を立てようとすれば、
 泥除に嚙りつくまでもなく、與曾平は腰を折つて、礎と倒れて、
 顔の色も次第に變り、之では却つて足手絡ひ、一式の御恩報
 じ、此のお供をと思ひましたに、最う叶はぬ、皆で首を縊めてく
 れ、奥様私を刺殺して、お心懸のないやうに願ひます。
 おのれやれ、死んで鬼となり、無事に道中はさせませう、魂が
 附添つて、と血狂ふばかりに急るほど、弱るは老の身體にこそ。
 口々に押宥め、民子も切に慰めて、お前の病氣を看護
 と謂つて此處に足は留められぬ。棄てゝ行くには忍びぬけれど
 も、鎮守府の旦那様が、呼吸のある内一目逢ひたい、私の心
 は察しておくれ、とかういふ間も心は急く、峠は前に控へて居る

し、爺ぢいや！

もし奥おく様さま。

と土間の端までゐざり出いでて、膝ひざをついて、手てを合あすのを、振ふりかへ返かへつて、母衣ほろは下おりた。

一臺だいの腕車わんしや二人にんの車夫しやふは、此この茶店ちやみせに留とどまつて、人々ひと／＼とともに手當てあてをし、些ちつとでもあがきが着ついたら、早速さつそく武生たけふまでも其日の内そのひうちに引返ひつかへすことにしたのである。

民子たみこの腕車くるまも二人ふたりがかり、それから三里半りはんだら／＼のぼりに、中空なかぞらに聳そびえたる、春日野峠かすがのたうげにさしかゝる。

ものの半道はんみちとは上のぼらないのに、車くるまの齒はの軋きしり強つよく、平地ひらちでさへ、分わけて坂さか、一分間ぷんかんに一寸すんづゝ、次第しだいに雪ゆきが嵩増かさますので、呼い

吸^きを切^きつても、もがいても、腕^{くるま}車^ぼは一歩^すも進^{すす}まずなりぬ。

前^{まへ}なるは梶^{かぢ}棒^{ぼう}を下^{おろ}して坐^{すわ}り、後^{あと}なるは尻^{しり}餅^{もち}ついて、御^ご新^{しん}造^ぞ

さん、とてもと謂^いふ。

大^{おほ}方^{かた}は恁^かくあらむと、期^ごしたることとて、民^{たみ}子^こも豫^{あらかじ}め覺^{かく}悟^ごし

たから、茶^{ちや}店^{みせ}で草^{わらぢ}鞋^はを穿^はいて來^きたので、此^{こゝ}處^{ほろ}で母^{はは}衣^えから姿^{すがた}を顯^{あらは}

し、山^{やまぢ}路^{ゆき}の雪^{おりた}に下^お立^{りた}つと、早^はや其^その爪^{つま}先^{さき}は白^{しろ}うなる。

下^{くだ}坂^{りざか}は、動^{うご}が取^きれると、一^{めい}名^いの車^{しや}夫^ふは空^{から}車^らを曳^ひいて、直^すぐ

に引^ひ返^{つかへ}す事^{こと}になり、梶^{かぢ}棒^{ぼう}を取^とつて居^ゐたのが、旅^{たび}鞆^{かばん}を一^{ひと}個^つ

背^{しよ}負^ふつて、之^{これ}が路^{みち}案^{あん}内^{ない}で峠^{たうげ}まで供^{とも}をすることになつた。

其^その鐵^{てつ}の如^{ごと}き健^{けん}脚^{きやく}も、雪^{ゆき}を踏^ふんではとぼ／＼しながら、前^{まへ}

へ立^たつて足^{あし}あとを印^{いん}して上^{のぼ}る、民^{たみ}子^こはあとから傍^{わきめ}目^めも觸^ふらず、攀^よ

のぼ ち上る 心 細さ。

せんさん ばんがく てふ／＼ 千 山 萬 岳 疊 々 と、北に走り、西に分れ、南より迫り、

ひがし おそ しゐ たか しろたへ 東より襲ふ四圍たゞ高き白妙なり。

やまぢやま のぼ みねますかきない たゞき いよく そび さるほどに、山又山、上れば峰は益累り、頂は愈々聳えて、

みわた みわた 見渡せば、見渡せば、此處ばかり日の本を、雪が封ずる光景か

な。

さいはひかぜ な 幸に風が無く、雪路に譬ひ山中でも、然までは寒くない、

ふ 踏みしめるに力の入るだけ、却つて汗するばかりであつたが、裾

たもとこは も袂も硬ばるやうに、ぞつと寒さが身に迫ると、山々の影がさ

して、忽ち暮なむとする景色。あはよく峠に戸を鎖した一軒の山

まが のき たど 家の軒に辿り着いた。

さて奥様、目當にいたして參つたは此の小家、忤は武生に勞
 働に行つて居り、留守は山の主のやうな、爺と婆二人ぐらし、
 此處にお泊りとなさいまし、戸を叩いてあけさせませう。また彼
 方此方五六軒立場茶屋もござりますが、美しい貴女さま、唯お一
 人、預けまして、安心なは、此の外にござりませぬ。武生の富
 藏が受合ひました、何にしろお泊んなすつて、今夜の様子を御
 覽じまし。此の雪の止むか止まぬかが勝負でござります。もし
 や留みませぬと、逆も路は通じません、降やんでくれさへすれば、
 そり雪車の出ます便宜もあります、御存じでもありませんが、此の邊
 では、雪籠といつて、山の中で一夜の内に、不意に雪に會ひま
 すると、時節の來るまで何方へも出られぬことになりますから、

わたくしかせぎにん、家は四五人も抱へて居ります、萬に一つも、もし、私は稼人、然やうな目に逢ひますと、媽媽や小兒がを釣らねばなりません、ぬで、此の上お供は出来かねます。お別れといたしまして、其處らの茶店をあけさせて、茶碗酒をぎうとあふり、其の勢で、やみくも暗雲に、とんぼを切つて轉げるまでも、今日の内に麓まで歸ります、とこれから雪の伏家を叩くと、老人夫婦が出迎へて、とみぎう富藏に仔細を聞くと、お可哀相のいひつゞけ。

行先が案じられて、我にもあらずしよんぼりと、門にイन्द入りもやらぬ、媚しい最明寺殿を、手を採つて招じ入れて、昇据ゑるやうに圍爐裏の前。

お前まあ些と休んでと、深切にほだされて、懷しさうに民子

がいふのを、いゝえ、さうしては居をられませぬ、お荷物にもつは此處こゝへ、もし御遠慮ごゑんりよはござりませぬ、足あしを投出なげだして、裾すその方ほうからお温ぬくもりなされませ、忘わすれても無理むりな路みちはなされますな。それぢやとつさん頼たのんだぜ、婆ばあさん、いたはつて上げてくんない。

とみさう 富藏さんとやら、といつて、民子たみこは思おもはず涙なみだぐむ。

へい、奥おくさま御機嫌ごきげんよう、へい、又また通りがかりにも、お供ともの御病人びやうにんに氣きをつけます。あゝ、いかい難儀なんぎをして、おいでなさる

さきの旦那様だんなさまも御大病ごたいびやうさうな、唯ただの時ときなら橋はしの上うへも、欄干らんかん

の方は避はうけてお通りなさらうのに、おいたはしい。お天道様てんたうさま、

何なに分ぶんお頼たのみ申まをしますぜ、やあお天道様てんたうさまといや降ふることはく。

あとに頼たのむは老人夫婦らうじんふうふ、之これが又また、補陀落山ふだらくさんから假かりにこゝへ、

庵いほりむすを結むすんで、南無大悲民子なむだいひたみこのために觀世音くわんぜおん。

其その情なさけで、饑うゑず、凍こえず、然しかも安心あんしんして寢床ねどこに入はいることが

出來できた。

佗わびしさは、食たべるものも、着きるものも、こゝに斷ことわるまでもない、

薄うすい蒲團ふとんも、眞まごころ心あたゝかには暖ことく、殊ちとに些たよは便たよりにならうと、故わざと佛ぶつ

間の佛壇ぶつだんのまへ前に、枕まくらを置おいてくれたのである。

心こゝろ靜しづかに枕まくらには就ついたが、民子たみこは何どうして眠ねむられよう、晝ひるの

疲勞つかれを覺おぼゆるにつけても、思おもひ遣やらるゝ後のちの旅たび。

更ふけ行ゆく閨ねやに聲こゑもなく、涼すずしい目めばかりぱち／＼させて、鐘かねの

音ねも聞きこえぬのを、徒いたづらに指ゆびを折をる、寂しんく々とした板戸いたどの外そとに、ばさ

りと物音ものおと。

民子は樹を這つた雪のかたまりであらうと思つた。

しばらくして又ばさりと障つた、さは 恠る時、かゝるとき 恠る山家に雪の夜半、

此の音に恐氣だつた、おと おぢけ 婦人氣はどんなであらう。

富藏は疑はないでも、とみざう うたが 老夫婦の心は分つて居ても、らうふうふ こゝろわか 孤家ひとつや

である、この孤家なる言は、ひとつや 昔語にも、お伽話にも、ことば むかしがたり

淨瑠璃にも、ものの本にも、じやうるり 年紀今年二十になるまで、民子の

耳に入つた響きに、みゝはひ ひび 一ツとして、ひとつ 悲惨悽愴の趣を今爰に囁き告

ぐる、材料でないのはいない。

呼吸を詰めて、いき つ なほ鈴のやうな瞳を凝せば、すゞ 薄暗い行燈の

灯の外、ひ ほか 壁も襖もかべ ふすま 天井も暗りでないものはなく、てんじやう くらが 雪に眩めい

た目には一しほで、め ひとつ ほのかに白いは我とわが、しろ われ 倅に立つ頬の邊を、おもかげ た ほと あたり

確乎^{しつか}とおさへて枕^{まくら}ながら幽^{かすか}にわななく小指^{こゆび}であつた。

あなわびし、うたてくもかゝる際^{さい}に、小用^{こよう}がたしたくなつたのである。

もし。ふるへ聲^{こゑ}で又^{また}、

もしくと、二聲^{ふたこゑ}三聲^{みこゑ}呼^よんで見たが、目^めざとい老人^{らうじん}も寐^ね入^{いり}

ばな、分^わけて、罪^{つみ}も屈^{くつ}託^{たく}も、山^{やま}も町^{まち}も何^{なん}にもないから、雪^{ゆき}の夜^よ

に静^{しづ}まり返^{かへ}つて一層^{いつそう}寐^ね心^{こころ}の好^よささうに、鼾^{いびき}も聞^きえずひツそり

して居^ゐる。

堪^{たま}りかねて、民子^{たみこ}は密^{そつ}と起^おき直^{なほ}つたが、世話^{せわ}になる身^みの遠慮^{えんりよ}

深^{ぶか}く、氣味^{きみ}が悪^{わる}いぐらゐには家^{いへ}のぬし起^{おこ}されず、其^{その}まゝ突臥^{つゝぶ}し

て居^ゐたけれども、さてあるべきにあらざれば、恐^{こは}々々^{／＼}行燈^{あんどう}を

引^ひ提^きげて、勝^{かつ}手^ては寢^ねしなに聞^きいて置^おいた、縁^{えん}側^{がは}について出^でよう
 とすると、途^と絶^だえて居^ゐたのが、ばたりと當^{あた}ツて、二三度^{どつど}續^{つづ}けさま
 にばさ、ばさ、ばさ。

はツと唾^{つば}をのみ、胸^{むね}を反^{そら}して退^すつたが、やがて思^{おも}切^{ひき}つて用^{よう}を
 達^たして出^でるまでは、まづ何^{なに}事^{ごと}もなかつた處^{ところ}。

手^てを洗^{あら}はうとする時^{とき}は、民^{たみ}子^こは殺^{ころ}されると思^{おも}つたのである。

雨^{あま}戸^どを一枚^{まい}ツト開^あけると、直^たちに、東^{とう}西^{ざい}南^{なん}北^{ぼく}へ五^り里^り十^り里^りの
 眞^ま白^{しろ}な山^{やま}であるから。

如何^{いか}なることがあらうも知^しれずと、目^めを瞑^{ねむ}つて、行^{あん}燈^{どう}をうし
 ろに差^さ置^おき、わなゝきく柄^{ひし}杓^{やく}を取^とつて、埋^うもれた雪^{ゆき}を拂^{はら}ひな
 がら、カチリとあたる水^{みづ}を灌^そいで、投^なげるやうに放^{はな}したトタン、

颯とばかり雪をまいて、ばつさり飛込んだ一個の怪物。

民子は思はずあツといった。

夫婦はこれに刎起きたが、左右から民子を圍つて、三人六の目を注ぐと、小暗き方に蹲つたのは、何ものかこれ唯一羽の雁なのである。

老人は口をあいて笑ひ、いや珍しくもない、まゝあること、

俄の雪に降籠められると、朋に離れ、塹に迷ひ、行方を失ひ、食に饑ゑて、却つて人に懷き寄る、これは獵師も憐んで、生命を取らず、稗、粟を與へて養ふ習と、仔細を聞けば、所謂窮鳥懷に入つたるもの。

翌日も降り止まず、民子は心も心ならねど、神佛とも思はるゝ

おいことばさか
老の言に逆らはず、二日三日は宿を重ねた。

其夜の雁も立去らず、餌にかはれた飼鳥のやう、よくなつき、

分けて民子に慕ひ寄つて、膳の傍に羽を休めるやうになると、は

じめに生命がけ恐しく思ひしだけ、可愛さは一入なり。つれ／

＼には名を呼んで、翼を撫でもし、膝に抱きもし、頬もあて、

夜は衾に懷を開いて、暖い玉の乳房の間に嘴を置かせて、すや／

＼と寝ることさへあつたが、一夜、凄じき寒威を覺えた。あける

と凍てて雪車が出る、直に發足。

老人夫婦に別を告げつつ、民子は雁にも殘惜しいまで不便

であつたなごりを惜んだ。

神の使であつたらう、この鳥がないと、民子は夫にも逢へず、

其その看護みどりも出來できず、且かつつやがて大尉たいゐに昇しょう進しんした少尉せうゐの榮さかえを見みることもならず、與會平よそべいの喜よろこ顔びがほにも、再さい會くわいすることが出で來きなかつたのである。

民子たみこをのせて出た雪車そりは、路みちを迂すべつて、十三谷やといふ難所なんしよを、たいせつきやくな客きやくばかりを千尋ちひろの谷底たにそこへ振り落ふおとした、雪ゆきゆゑ怪我けがはなかつたが、落込おちこんだのは炭焼すみやきの小屋こやの中なか。

五助ごすけ。

權九郎ごんくろう。

といふ、兩名りやうめいの炭焼すみやきが、同一雪籠おなじゆきごめに會あつて封じ込められたやうになり、二日三日ふつかみつかは貯蓄たくはへもあつたが、四日よつかめ目から、粟あは一粒ひとつぶも口くちにしないで、熊くまの如ごとき荒漠あらをのこら等、山狗やまいぬかとかばかり瘦や

おとろ
せ衰へ、目を光らせて、舌を嚙んで、背中合せに倒れたまゝ、

うめこゑ
唸く聲さへ幽な處、何、人間なりとて容赦すべき。

おびと
帶を解き、衣を剥ぎ、板戸の上に縛めた、其のありさまは、こゝ

に謂ふまい。立處其の手足を炙るべく、炎々たる炭火を熾

して、やがて、猛獸を拒ぐ用意の、山刀と斧を揮つて、あ

はや、其胸を開かむとなしたる處へ、神の御手の翼を擴げて、其

ひざそのて、そのかた、そのはぎくる、膝、其手、其肩、其脛、狂ひまつはり、搦まつて、民子の膚を蔽

うたのは、鳥ながらも心ありけむ、民子の雪車のあとを慕うて、

おほぞら
大空を渡つて來た雁であつた。

またゝま
瞬く間に、雁は炭焼に屠られたが、民子は微傷も受けな

いで、まつたたまやす
完き壁の泰らかに雪の膚は繩から抜けた。

可^よし、
渠^{かれ}等^らは敢^{あへ}て鬼^{おに}ではない、食^{じき}を得^えたれば人^{ひと}心^{こころ}地^ちになつて、恰^{あた}も
谷^{たに}間^{あひ}から、いたはつて、負^{おぶ}つて世^よに出^でた。

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷六」岩波書店

1941（昭和16）年11月10日第1刷発行

1974（昭和49）年4月2日第2刷発行

入力：土屋隆

校正：門田裕志

2005年10月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.waozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

雪の翼

泉鏡花

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>